

# 未来の子供たちに手渡せるバトンとは？

## ～あたらしいものづくりと暮らし方のか・た・ち～

地球環境の悪化が深刻化する中で、未来に向けてどう行動すればいいのか。地球物理学、材料科学、環境科学を専門とし、「ネイチャー・テクノロジー」を提唱する石田秀輝氏が、ものづくりのパラダイムシフトと心豊かな暮らし方について語った。

講師：石田 秀輝 氏



地球村研究室 代表／東北大学 名誉教授／星槎大学 特任教授／星槎大学サテライトカレッジin沖永良部島 校長／  
一般社団法人サステナブル経営推進機構 理事長

### 地球環境と物質的消費欲求が 史上初めて同時に劣化

現在の豊かさと将来の豊かさの両方を、担保することはできないのだろうか。それには、地球環境の劣化と物質的消費欲求の劣化について考えなければいけない。現在のように両者が同時に劣化するの、人類史上例がない。

まず地球環境問題には資源、エネルギー、生物多様性、水、食料、人口、気候変動と海洋流出プラスチックの八つのリスクがある。特に重要なリスクは生物多様性の劣化、気候変動、海洋流出プラスチックで、この三つは2030年ごろまでに解を出さなければ、文明崩壊の引き金を引くことになるかもしれない。

次に物質的消費欲求の劣化の問題だ。かつて三種の神器だったテレビ、冷蔵庫、洗濯機は1980年代前半に普及率100%を超え、今や「断捨離」「ミニマリスト」に代表されるように、人々がモノの豊かさを求めない時代が到来している。

またグローバル化により、開発途上国も先進国化し、世界的に経済成長率が落ちている。ポスト成熟化社会という新しい価値観を生み出さなければ、早晩さまざまなものが限界を迎える。

### バックキャスト思考法によって 心豊かに暮らす生活スタイルを

現状分析を積み上げて未来を見通す「フォアキャスト」ではなく、未来の制約を前提にして考える「バックキャス

ト」の思考法が重要になる。地球環境と豊かな暮らしを天秤にかけるのではなく、厳しい地球環境制約の中でもワクワクドキドキ心豊かに暮らすためにどうするのか、新たな発想と生活スタイルを生み出していくことだ。

例えば、電気自動車の開発が進んでいるが、バックキャスト思考で考えると、さらに踏み込んで、車のいらぬ街や、そこで使用する一人乗り用の移動媒体の開発などがイメージできる。

自然界からも多くのことが学べる。例えばカタツムリの殻は、薄い水膜を張ることによって汚れの付着を防いでいる。私たちはこの特徴を研究して、雨が降っただけできれいになる外壁用タイルなどの開発につなげた。また、虫たちが利用する泡に注目して泡の風呂を開発し、大幅な節水を実現した。こうした「ネイチャー・テクノロジー」を活かすことで、制約の中からも豊かさを生み出すことができるのではないだろうか。

### 依存型と自立型の「間」は ビジネスにとって宝の山

現代社会では、テクノロジーやサービスが何でもしてくれる依存型のライフスタイルが主流だ。これが極端な形になれば、「完全介護型」のライフスタイルになる。これは何もしなくて済むように健康な人をベッドに縛り付けているようなものだ。

今、社会が求めているのは依存型ではなく「自立型」のライフスタイルなのだ。ただし依存型の生活に慣れた人々が、すぐに自給自足のような自立型の生活をするのはハードルが高い。自立と依存の間には「間」があるのだが、現状ではこれがすっぽり抜けた「間抜け」の状態になっている。

その「間」を埋めるということは、ちょっとした不自由さや不便さを、自分やコミュニティの知恵、技、知識で超えることによって達成感、充実感、愛着感が生まれる世界であり、脳科学的にも説明できる。これは利便性をおおるモノを欲しがらない若者が増えていることにも関係があるのではないかと。「間」はビジネスにとって宝の山であり、企業はバックキャスト思考で「間」を埋めるテクノロジーやサービスを提供すべきである。

私は現在、沖永良部島という鹿児島市から550km南の島で暮らしながら、これらの考えを社会実装する実験をしている。未来における豊かさは今の豊かさと同じとは限らない。未来の子供もたちに手渡せるバトンは今の延長にはない。ますます厳しくなる地球環境制約と正対し、そんな中でもワクワクドキドキ心豊かに暮らせる「間」を埋めるライフスタイルとそれに必要な新しいビジネスのかたちが必要とされているのである。